

【学会名】 国際ショパン学会 2016 「19 世紀の器楽音楽における抒情詩と声楽の要素」

Międzynarodowe Konferencje Chopinologiczne

(International Chopinological Conferences)

Konferencja 2016: Liryka i element wokalny w muzyce instrumentalnej XIX wieku

(Conference 2016: The lyric and the vocal element in instrumental music of the nineteenth century)

【開催日】 2016 年 9 月 16～18 日

【開催地】 ラジェイヨヴィツェ (Radziejowice, ポーランド、マゾフシェ県)

【主催】 国立フリデリク・ショパン研究所 (Narodowy Instytut Fryderyka Chopina)

<http://pl.chopin.nifc.pl/institute/events/conferences/id/2016>

【発表学会について】

本会は、フリデリク・ショパン国際ピアノコンクール主催組織でもある国立フリデリク・ショパン研究所 (以下 NIFC) が、2016 年より次期コンクール開催の 2020 年まで計画した国際学会ツィクルスの初回として開催された。ショパンの作品における重要な問題を扱っていくには、これからは比較の視点が重要であり、5 年にわたるツィクルスの最大の主眼は、そうした比較研究の可能な素材を収集、組成していくことにあるという。開会の挨拶において、NIFC 所長のシクレネル (Artur Szklener) 博士は、特に「歴史的視点」や「学際研究の重要性」等を主眼としており、初年度の本会は「リリシズム」を中心に据え、分析、間テクスト性等を用いた新しい様々な視点による発表がなされることを述べた。

全 3 日間にわたる本会は、シクレネル氏の発言通り様々な視点からの発表が行われた。発表者は、現在ショパン研究において著名なトマシェフスキ (Mieczysław Tomaszewski) 教授、ポニャトフスカ (Irena Poniatowska) 教授、ノヴィク (Wojciech Nowik) 教授、また演奏研究でも活躍されているハミルトン (Kenneth Hamilton) 教授、ローランド (David Rowland) 教授等の錚々たるメンバーから、ヨーロッパと北アメリカの各国で活躍する、筆者と同年代の若手研究者に至るまで幅広く、全 21 名が揃った (但し日本を含むアジアからの発表者は、筆者のみであった)。使用言語は英語ないしポーランド語であり、発表原稿に対しては両言語の全訳が配布され、参加者全員が内容を理解できるよう配慮された。発表時間 20 分、質疑応答 10 分が予定されていたが、かなり余裕をみて日程が組まれていたため、多くの発表者が時間を超過して発表し、また質疑でもあまり時間にとらわれることなく活発な議論が展開され、発表者にとってはそれぞれ非常に充実度の高いセッションを持つことができた。

【研究発表要旨】

筆者は最終日、9月18日午前9時からのセッションで、発表タイトルを「ショパンのバラード構造におけるポーランド詩の影響」とし、ポーランド語で発表を行った。ショパンがその詩に歌曲を書いており、かつ今日でもなお高く評価されている二人の詩人ミツケヴィチとクラシンスキを、まずは取り上げ、ショパンが作曲した彼らの詩をオリジナルまで辿り、詩の技法や文法の視点から分析した。続いて、詩の分析を元に歌曲を分析した結果、ショパンが詩の内容で生じている場面転換（特に時空間の移動）に対し、転調や和声進行をかなり効果的に用いていることを指摘した。

これらの詩と歌曲の分析をもとに、ショパンの《バラード》構造について、ポーランド文学の「バラード」の構造と比較しつつ分析、解釈を行った。ショパンが始めた、言葉のないピアノ独奏曲としての《バラード》は、どのような構造を持つジャンルとして捉えるべきか。これについて、今日に至るまで明快な、説得力ある説は提示されていない。そこで筆者は、ポーランド文学において、「バラード」の理論書として最も重要視されて来た『ポーランド・バラード *Ballada Polska*』（ズゴジェルススキ著）と『バラード *Ballada*』（ズゴジェルススキ／オパツキ著）を辿り、これらで詩の「バラード」が、どのような構造を持つと定義されてきたかについて確認した。そこから、まずは「バラード」が「抒情詩」「叙事詩」「戯曲」の三要素を基盤に持つことを踏まえた上で、特に今回は学会のテーマに即して「抒情詩」の要素に着目しつつ、一点目に「ナレーターの時間・空間」、二点目に「筋における類似断片の反復と再帰」という二つの観点を取り出し、具体的な分析を試みた。

一点目について。一般に「叙事詩」におけるナレーターは、作品の中で一貫した存在であり続ける。ところが「バラード」では、そこに「抒情詩」の要素が干渉する結果、ナレーターの時空間移動が生じ、ナレーターや登場人物たちの立場に、かなり複雑な変化を伴い得る。こうした構造について、ミツケヴィチの数点の「バラード」と、ショパンの op.38 と op.47 の《バラード》を例に比較分析し論証した。

二点目について。「叙事詩」では、おおよそ時系列に沿って首尾一貫して話が進むが、そこに加わる「抒情詩」の要素が強まるほど、時系列ではなく「連や詩行による枠組」自体が、筋の展開を担うようになる。その結果、連や詩行が冒頭、中間、結尾で類似断片を繰り返しながら、内容的には反転や、想像し得なかった劇的展開を生じ得る。この例について、フィレボルの「バラード」と、ショパンの op.52 と op.23 の《バラード》を例に比較分析し論証した。

以上二点から、ショパンの《バラード》には、文学の「バラード」が孕む「抒情詩」的構造と同等の構造が見られることを結論づけた。最後に、今回は学会のテーマ上「抒情詩」の観点に集中したが、「叙事詩」「戯曲」の観点からも検証し、そうした様々な角度から捉えることで、ショパンの《バラード》が一体どういう構造を持つジャンルと言えるのか、より適切な定義づけが今後可能となるだろうという見通しを提示し、本発表を終了した。

【質疑、反響と感想】

出席者全員への配慮から、司会進行と質疑応答は基本的に英語で行われた。本セッションの司会を担当頂いたNIFC副所長のマルフヴィツァ (Wojciech Marchwica) 博士は、まず筆者の発表前の導入として、本発表は音楽と文学とを、非常に重要なコンテキストとリソースで読み取るものであると、ご紹介下さった。そして発表後には、質疑に入る前に司会者としてのご質問を頂いた。「文学の「バラード」においても、あらゆるかたちのバラードがあるため定義は難しいと、ズゴジェルスキも述べているし、バフチンも、バラードは「混合物」であると述べている。一方で、ショパンの《バラード》で何らかの基盤作りは可能か。今回の分析は特に和声に重点が置かれていたと思うが、貴女の研究では和声を基盤としているのか。」とのことであった。これに対し「まさに「混合物」だからこそ、あらゆる観点からの分析が必要だと思います。ズゴジェルスキはそう言いつつも、あらゆるバラードを扱いながら、やはり「バラード」に対し、ある程度の定義を試みている。ショパンでも同様の試みが可能だと思います。私は別に和声だけを論じるつもりはなく、今回の発表原稿でも、特に5章ではモチーフの扱い方を中心に据えました。和声だけでなく、モチーフ、リズムなど、あらゆる観点から分析するべきです。」と回答した。

筆者の発表には、質疑の枠を超えて多くの反響があり、特にポーランド人研究者から、筆者の論に対し多大な賛同を頂いた。これまで出されてきた多くのショパンの《バラード》分析・解釈が、(ショパン自身何も説明していないにもかかわらず) あまりに具体的であり過ぎたのに対し、筆者の提言は体系的で度を超していないところが非常に良かったという、ポニャトフスカ教授やグラナト (Zbigniew Granat) 教授の評価は、筆者の意図にまさに一致するものであり、こうした評価を頂けたことは大変光栄であった。さらにグラナト教授、フヴィウヱク (Agnieszka Chwiłek) 博士からは、本発表テーマを含んだ筆者の博士論文を、英語かポーランド語で読みたいとのご感想まで頂いた。

また本発表ではピアノ演奏と歌も交えたが、その点でも説得力があったとの声を複数頂いた。ハミルトン教授をはじめポーランド以外の研究者からは、特にポーランド文学の内容に関して知らなかったとの声が多く、今後こうした着眼点が、ショパンに関する「比較研究」「学際研究」として、ますます価値を持つように感じられた。その意味でも、本会と5年にわたるツィクルスの目的は非常に意義深いものを感じ、来年度以降の「バロック以来の伝統」「インテグレーション」「ダンスの要素」といったテーマも、またどのように展開されていくのか楽しみに思われた。

最後に、国際研究発表へのご支援を賜りました、住友生命保険相互会社と日本音楽学会に、心より感謝申し上げます。